指導と評価の年間計画・評価規準の作成について

２　地理歴史

＜目次＞

Ⅰ　「指導と評価の年間計画」及び「評価規準と単元計画」の作成の手引き　Ｐ１～２

Ⅱ　「指導と評価の年間計画」（地理Ｂ）＜例＞　Ｐ３～４

Ⅲ　「評価規準と単元計画」（地理Ｂ）＜例＞　Ｐ５～６

Ⅳ　「学習指導案」（地理Ｂ）＜例＞　Ｐ７

Ⅰ　「指導と評価の年間計画」及び「評価規準と単元計画」の作成の手引き

１　「指導と評価の年間計画」について

これは、次の２の「評価規準と単元計画」の全単元について、その概要を記述したものである。生徒の学習活動に対するより適正な評価、及び生徒の学習の改善に生かされる評価（指導と評価の一体化）の実現を目指して作成する。

これまで作られてきた指導計画は、多くの場合、学習内容（指導内容）を単に１年間の授業時間数に対して配分しただけに留まっていたが、この「指導と評価の年間計画」では、「学習項目」、「授業時間数」、各授業ごとの「主な学習活動（指導内容）と評価のポイント」、「評価方法」を記述する。

２　「評価規準と単元計画」について

学習指導要領に基づく「評価規準と単元計画」は、言い換えれば、評価規準を盛り込んだ「単元ごとの指導と評価の計画」である。次の内容構成で作成する。

◎「単元名」、「単元の目標」、「単元の評価規準」、「指導と評価の計画（○時間）」を示す。なお、「単元」とは、ほとんどの教科書の「節」に該当するものである。

・「単元の目標」

実際の使用教科書等に基づいた授業の進度に沿って単元ごとに示した目標。学習指導要領の項目ごとのねらいをもとに記載する。

・「単元の評価規準」

単元ごとに４観点別に示した評価規準。「内容のまとまりごとの評価規準」を単元の内容に即して具体化したもの。

◎「指導と評価の計画（○時間）」を示す。そこには、「次程」、「学習活動」、「評価の観点」、「評価規準等」を示す。

・「学習活動」、「評価の観点」

上記の１の「指導と評価の年間計画」の「各授業ごとの主な学習活動（指導内容）と評価のポイント」に反映されていなければならない。

・「評価の観点」

「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「資料活用の技能」及び「知識・理解」に評価の観点を整理し、各教科等の特性に応じて、適切に設定しなければならない。

・「評価規準等」

評価規準は、「目標」を具体化したものであり、目標が生徒の学習状況として実現された状況を具体的に想定して示す。

・「評価方法」

評価方法については、各学校で各教科・科目の学習活動の特質、評価の観点や評価規準、評価の場面や生徒の発達の段階に応じて、観察、生徒との対話、ノート、ワークシート、学習カード、作品、レポート、ペーパーテスト、質問紙、面接などの様々な評価方法の中から、その場面における生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択していく。

※平成２４年３月に、国立教育政策研究所教育課程研究センターから、「評価基準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校　地理歴史）」が示され、次のＵＲＬからダウンロードすることができる。

http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/kou/02_kou_tirirekishi.pdf

「評価規準と単元計画」＜例＞

（１）単元名：○○○○

（２）単元の目標
ア　○○○○○○○○
イ　○○○○○○○○
ウ　○○○○○○○○
エ　○○○○○○○○

（３）単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
・○○○○○○○○ ・末尾の表現 （例）「～に対する関心と課題意識を高めている。」「～について意欲的に追究している。」等	・○○○○○○○○ ・末尾の表現 （例）「～について、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。」等	・○○○○○○○○ ・末尾の表現 （例）「～から有用な情報を適切に選択している。」「～を図表などにまとめたりしている。」等	・○○○○○○○○ ・末尾の表現 （例）「～を理解し、その知識を身に付けている。」等

（４）指導と評価の計画（○時間）

次程	学習活動	関	思	技	知	評価規準等
第一次（○時間扱い）	【ねらい】○○○○○○○ ・末尾の表現 （例）「～をつかませる。」「～を捉えさせる。」「～について理解させる。」「～を展望させる。」「～を高めさせる。」「～について説明させる。」「～を見いださせる」「～について考察させる。」「～を表現させる。」等 ・学習活動の主な項目を記載する。		・該当する評価の観点に、●を記載する。			・評価の規準及び具体的な評価の方法を記載する。
第二次（○時間扱い）	【ねらい】○○○○○○○					

Ⅱ　「指導と評価の年間計画」（地理Ｂ）＜例＞　　その１

第２学年用２単位（第３学年まで継続　計５単位）

目　標 【学習指導要領】	現代世界の地理的事象を系統地理的に、現代世界の諸地域を歴史的背景を踏まえて地誌的に考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。
到達目標に向けての具体的な取り組み 【評価規準を念頭に置いた指導の上の留意点】	・日本、世界の自然災害、時事問題に常に関心をもたせ諸資料を収集・整理し、タイムリーな話題を提供することにより主体的に取り組む姿勢を養う。 ・身近な地形や環境及び社会事象を例に、地域社会への関心をもたせる。 ・様々な地図の読図や作図などの作業的、体験的な学習を通して地理的技能を身に付けさせる。 ・現代世界の地理的認識を深めるとともに地理的な見方や考え方を培う学習を通して、国際社会に主体的に対応して生きるとともに、平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民としての自覚と資質を養う。

月	単元名	使用教科書項目	時	主な学習活動（指導内容）と評価のポイント	評価方法
4月	第Ⅰ部 さまざまな地図と地理的技能	１章　地理情報と地図 １節　現代世界の地図 ２節　地図の種類とその利用 ３節　地理情報の地図化 ２章　地図の活用と地域調査	 1 2 2 2	・身の回りにある地図の種類やその活用方法を考える。 ・地理情報を地図化し、その利点を考える。 ・地図の作られた時代背景を考える。 ・地理学習にとって地域調査は、その地域を知るための基本であることを理解する。 ・技能としての読図や作図の能力を身に付ける。	生徒観察 作業学習 確認 小テスト
5月	第Ⅱ部 現代世界の系統地理的考察	１章　自然環境 １節　世界の地形 ２節　世界の気候	 6 3	・特徴的な地形とそこで生活する人々の様子を探る。また、様々な環境の中でどのような工夫をして生活しているかを捉える。 ・世界の様々な地形の形成要因を理解する。 ・気候要素や気候因子を抽出しながら、世界の気候の成り立ちとその分布について考察する。	生徒観察 作業学習確認 小テスト
6月	同上	定期考査 ３節　日本の自然の特徴と人々の生活	1 7	・気候と植生や土壌との関係を理解する。また、ケッペンの気候区分との関連性を考える。 ・日本列島の位置や地形の特徴、気候的特徴を総合的に捉えて、その相違と各地の人々の生活を考える。	生徒観察 作業学習確認 定期考査
7・8月	同上	４節　環境問題	4	・世界の様々な環境問題が、どこでどのように起きているのかについて諸資料を収集して図表化する。 ・様々な環境問題を身近なレベルから解決していく方法を考える。	生徒観察 作業学習確認 小テスト
9月	同上	２章　資源と産業 １節　産業の発達と変化 ２節　世界の農林水産業 定期考査	 3 4 1	・我々人間が自然環境にどのようにアプローチして産業を発展させてきたのかを考える。 ・農作物や家畜の分布が地域によって異なる理由を考える。 ・自然条件や社会条件により様々に展開される農業の形態や分布の特徴を農業区分から捉える。	生徒観察 作業学習確認 定期考査
10月	同上	３節　食料問題	9	・日本の農業の特徴と世界の農業との相違、日本が抱える農業問題と世界全体が抱える農業問題などを理解する。 ・世界の食料需給に関する情報を収集し、それを地図や図表にまとめるなどして資料を作成する。それに基づいて自らの解釈も加えて発表し、食料供給の課題を考える。	生徒観察 作業学習確認 小テスト
11月	同上	４節　世界のエネルギー・鉱産資源 ５節　資源・エネルギー問題 定期考査	4 3 1	・エネルギーや鉱産資源の分布と特徴を捉える。 ・エネルギーや鉱産資源と世界の工業の分布との関係性を探る。	生徒観察 作業学習確認 定期考査
12月	同上	６節　世界の工業	5	・エネルギーや鉱産資源の現状と課題を理解する。 ・世界各地の工業について、その特徴や種類ごとに系統的に捉える。 ・現代世界における工業の現状と課題を理解する。	生徒観察 作業学習確認 小テスト
1月	同上	７節　第３次産業	5	・第３次産業の現状と進展の様子を捉える。 ・情報化によって第３次産業がどのように発展してきたかを考える。	生徒観察 作業学習確認
2・3月	同上	８節　世界を結ぶ交通・通信 ９節　現代世界の貿易と経済圏 定期考査	3 3 1	・様々な交通機関の発達と課題を考えるとともに、地域間の差を捉える。 ・様々なモノが行き交う現在の貿易の現状を捉える。 ・貿易によって結び付く世界を確認し、結び付くことで生じる利点や課題を考える。	生徒観察 作業学習確認 定期考査
		合計時間数	70		

「指導と評価の年間計画」（地理Ｂ）＜例＞　　その２

第３学年用３単位（第２学年から継続　計５単位）

※目標と到達目標へ向けての具体的な取組は、第２学年と同じ。

月	単元名	使用教科書項目	時	主な学習活動（指導内容）と評価のポイント	評価方法
4・5月	第Ⅱ部 世界の諸地域	１章　市町村規模の地域調査 １節　身近な地域の調査 ２節　離れた地域の調査 ２章　地域をみる方法 ３章　国家規模の地域の調査 １節　アメリカ合衆国 ２節　オーストラリア ３節　インド	 3 2 2 5 5 5	・地理学習にとって地域調査は、その地域を知るための基本であることを理解させる。 ・技能としての読図や作図の能力を身に付けさせる。 ・環境条件によって、地域ごとに人々の営みが変化することを理解させる。 ・多民族、多文化の存在する複雑な社会アングロアメリカを植民地の歴史から理解させる。 ・アングロアメリカの発展を地理的、経済的な観点から把握させる。また、他地域との交流の中でアングロアメリカの果たす役割を理解させる。 ・広大な土地からなるオセアニアの地域別相違を理解させる。また、様々な環境の中で人々がどのように適応しているか考えさせる。	生徒観察 作業学習確認 小テスト
6月		定期考査 ４章　州・大陸規模の地域の調査 １節　西アジア・中央アジア ２節　ヨーロッパ ３節　東南アジア	1 5 6 5	・イスラームを通して、西アジア、中央アジアの民族交流と文化を理解する。 ・経済的、政治的つながりの深いヨーロッパ諸国又は東南アジア諸国であるが、多様な民族、文化、自然環境など様々なファクターをどう尊重しながら統合しているのか理解させる。	定期考査 生徒観察 作業学習確認 小テスト
7・8月	第Ⅲ部 グローバル化する現代社会	１章　近隣諸国の研究 １節　韓国の研究 ２節　中国の研究	 5 3	・韓国の自然と文化について、日本との比較を通して、その特徴を理解させる。 ・多民族国家中国における少数民族の現状を理解させる。 ・社会主義体制をとる中国が、市場経済をなぜ導入したかを考察させる。	生徒観察 作業学習確認 定期考査生徒観察 作業学習確認
9月		定期考査 ２節　中国の研究 ３節　ロシアの研究	 1 6 6	・日本と中国の経済関係は極めて緊密であり、今後どのように交流を深めていけばいいかを考えさせる。 ・広大な国土をもつロシアには、ロシア人以外にも多くの少数民族が生活していることを理解させる。 ・ロシアと東アジア諸国、とりわけ日本との交流や経済関係を理解させる。	
10月		４章　地域区分でとらえる現代世界 １節　地域区分の目的と方法 ２節　地域区分でとらえる現代世界の課題	 4 5	・地域区分には、国境のような明確な境界線がない場合があることを理解させる。 ・地域区分によって、他地域との比較やつながりを明確にすることができることを理解させる。	
11月	第Ⅳ部 地球的な課題	２章　都市・居住問題 １節　世界の都市・居住問題 ２節　様々な都市・居住問題 ３節　日本の都市・居住問題 ４節　都市・居住問題への取り組み	 4 4 3 2	・都市の立地と機能、都市人口が増加する地域の特徴を理解させる。 ・発展途上国と先進国の都市問題の違いと、その解決への努力を理解させる。 ・都市問題の解決のために、どのような取り組みがなされているかを考察させる。	生徒観察 作業学習確認
12・1・2月		４章　民族・領土問題 １節　世界の民族・領土問題 ２節　様々な民族・領土問題 ３節　民族・領土からとらえた日本 ４節　民族の共生へ向けての課題	 5 5 3 4	・言語や宗教の違いがなぜ対立の原因となるのかを考察させるとともに、政治的主導権の奪い合いも大きな原因であることを理解させる。 ・民族対立だけでなく、諸外国の思惑が事態をさらに複雑化し、問題を解決困難な状況に追い込んでいる側面を理解させる。 ・日本に住む外国人に対する偏見をなくし、共生を図るためにはどうするべきかを考察させる。	生徒観察 作業学習確認 定期考査
		定期考査 現代世界と日本	1 5	・生徒が課題を設定し、探究しながら資料を作成し、それに基づいて自らの解釈も加えて発表し意見交換をしたり、論述したりする言語活動、さらに学習成果を社会に提言するなど社会参画を目指すことを視野に入れた一連の主体的な学習を行う。	生徒観察 作業学習確認 発表
			合計時間数 105		

Ⅲ　「単元指導計画」（地理Ｂ）　＜例＞

単元の名前　「外的営力によってつくられる小地形」

□単元の目標
外的営力によって形成された地形と人々の生活の関わりについて理解させる。
□基軸となる問い
外的営力によって形成された地形は、人々の生活とどう関わってきたか。
□単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
自然環境と人間生活との関わりを基に、世界と日本の自然環境に対する関心と課題意識を高め、それを意欲的に追究し、捉えようとしている。	世界や日本の自然環境について、分布や人間生活との関わりなどを考察し、また、相互に関連する課題を大観させ、その過程や結果を適切に表現している。	世界や日本の自然環境に関する諸資料を読み取り、その中で有用な情報を選択することができる。また、選択した資料を活用し、分かったことを説明できる。	世界や日本の自然環境について、分布や人間生活との関わりなどとともに、相互に関連する課題や、系統地理的に捉える視点や考察方法を理解し、その知識を身に付けている。

□指導と評価の計画(5時間)

次程	学習活動	評価の観点 関	思	技	知	評価規準等
第一次（一時間）	【ねらい】本校付近の長良川がどのような地形を形成したかを、資料から読み取る(氾濫原・扇状地)。 ≪問い≫長良川が形成した岐阜市の地形は？					
	・新旧地形図の簡単な読み取りで、長良川が分流していた様子をつかませる。 ・形成された地形の土地利用を見ることで、地形と人々の生活との関わりを考えさせる。			●		・資料を読み取り、積極的に意見交換している。 ・写真を見て、浸水被害を防ぐために自然堤防上に集落が立地していることを読み取ることができる。後背湿地に岐阜大学があることに気付く。 ・岐阜市の他の地域の地形図の読み取りから、本時の学習をいかした説明ができる。
第二次（一時間）	【ねらい】長良川の上流から下流までの地形を見て、地形の形成要因を理解する。 ≪問い≫地形はどのように形成されるのか？					
	・長良川の上流から下流まで一気に地形を見ていく。 ・長良川上流の地形（河岸段丘）、中流域の地形（氾濫原）、下流域の地形（三 角州）を、写真などで追っていく。 ・扇状地の写真から、扇状地の特徴と土地利用について理解させる。				●	・それぞれの地形の形成要因を理解している。 ・岐阜市内も長良川扇状地であることに気付いている。 ・滋賀県高島市の地形図と写真から、扇状地の特徴を理解している。また、養老町の地形図から扇状地を読み取ることができる。
第三次（一時間）	【ねらい】河川による土砂の運搬作用が、三保松原の景観に影響を与えていることを、資料から考察させる。 ≪問い≫世界遺産「三保松原」はどのように形成されたのか？					
	・「三保松原」の形成について説明する。 ・「三保松原」の保全と海岸侵食対策の 強化の要望がある理由を考えさせる。 ・河川と海岸地形の関係を考えさせる。 ・長良川と干潟の関係に着目させる。		●			・砂浜海岸(砂嘴や砂州)の形成過程を理解し、砂浜海岸が堆積と侵食の微妙なバランスで成立していることを考察している。 ・河川による土砂の運搬作用が、三保松原の景観に影響を与えていることを、資料から説明できる。 ・長良川も海岸の地形（干潟）と大きく関係していることを説明できる。

第四次（一時間）	【ねらい】修学旅行先の長崎の海岸の地形から、日本や世界の海岸地形について比較させる。 ≪問い≫修学旅行先・長崎の海岸の特徴は？					
	・長崎県の九十九島は、陸地が海面に沈水した地形であることを確認させる。 ・リアス海岸は山地が沈水した海岸であることを理解させる。 ・フィヨルドとリアス海岸の違いを理解させる。 ・日本にエスチュアリーが発達しにくい理由を考えさせる。		●			・修学旅行先の地形に関心がもてる。 ・リアス海岸の形成要因を理解できる。 ・フィヨルドとリアス海岸の形成過程の違いを説明できる。 ・日本の地形とヨーロッパの地形を比較する中で、エスチュアリーの形成過程を説明できる。
第五次（一時間）	【ねらい】長年にわたるさまざまな自然界の作用や、昔の自然環境のなかで生み出された地形について、近隣地域の比較的身近な事例を用いながら理解する。 ≪問い≫昔の「岐阜」は海の中だった。昔の「岐阜」はスイスと同じだった。これホント？					
	・石灰岩地形が大垣市にも見られること、沖縄等にある島にはサンゴ礁が隆起して形成されたものがあり、石灰岩地形があることを学ばせ、大垣市付近の太古の昔の環境を想像させる。 ・石灰岩地形が大垣市を代表する産業と関連をもつことを学ばせる。 ・最後に、氷河が作る地形や乾燥帯の地形など、長年の自然について説明する。	●				・石灰岩地形の形成は太古のサンゴ礁と関連があり、岐阜のあたりの太古の昔の環境に想像をめぐらすことができる。 ・あられなどの乾燥剤には岐阜県大垣市産の石灰岩が利用されていることに関心がもてる。 ・中緯度地域の日本でも最近氷河が見つかったことや、山岳氷河による氷河地形が岐阜県でも見られることに関心がもてる。

Ⅳ　「学習指導案」（地理Ｂ）　＜例＞

単元名	外的営力によってつくられた小地形
本時の主題	岐阜を代表する清流、長良川が形成した地形を見てみよう(1時間目/5時間)
本時の目標	高校の近郊の地形が、長良川の作用によって形成されたことを理解させ、諸資料の読み取りから、岐阜大学の立地やメモリアルセンターの立地、則武での畑作など、長良川の形成した地形と現在の人々の生活との関わりについて考察させる。
評価規準	写真資料、地形図、模式図を分析し、隣同士で意見交換を重ねる中で、地形と生活や社会　環境との関わりについて読み取っている。また、筋道を立てて、クラスの仲間に説明ができる。　【資料活用の技能】

指導の内容・ねらい	学習内容	指導上の留意点・観点別評価
・本時の導入 写真をみて隣同士でフリートーク	写真を見て気付くことを挙げてみよう。 ・県立岐阜商業の近くで撮影した写真を取り上げ、地形の特徴について気付いたことを表現できる。 (道路の高低、緩やかな坂、石垣の積まれた住宅)	○プリントにも写真を掲載しているが、パワーポイントでも提示する。
・地形図を用いた簡単な作業と気付いたことをフリートーク	地形図と古い絵地図をみて、気になることを説明してみよう。 ・メモリアルセンター～マーサ間の道路が古々川と、メモリアルセンター～岐阜清流中～大福町の県営アパート間の道路が古川と一致することが分かる。 =かつて長良川は分流していたという事実をつかむ。 ※古川、古々川の流路を地形図に着色させる。 ※都ホテル南側の堤防道路にある、河川の締切工事の記念碑の存在について尋ねる。 ※本校教員の自宅(鷺山)で見つかった石を見せ、その辺りがかつて川床だったことを想定させる。	○気付きのずれがあると考えられる。机間巡視する中で、ヒントを与えていく。 ○2万5千分の1地形図と「長良古川・古々川締切附近略図」の提示
・本時の重要なQの提示	地形図と資料を見比べ、土地利用の特徴として分かることは何か。 ・県立岐阜商業付近の則武や島は畑や桑畑が多く、鷺山や木田、黒野付近は水田の利用が多いことをつかむ。	○岐阜市の小学校で使用する資料集のコピーと先の地形図の簡単な読み取りを行う。 (評価方法)　発表　【技能】
・本時の重要なQの提示	長良川が形成した地形とは何か。 ・氾濫原(自然堤防、後背湿地)の模式図を読み解く。 ・地形と土地利用の関連性を学び、先ほどの岐阜市の例と結び合わせる。	○氾濫原(自然堤防、後背湿地)の説明を行う。しかし、「集落の多い地形＝自然堤防」、「畑の多い地形＝自然堤防」、「水田の多い地形＝後背湿地」という関係は、資料と模式図から考えさせる。
・自然堤防と洪水被害の関係を考える	長良川が洪水を起こした時の写真を見て、気付くことを挙げよう。 ・浸水被害で水没している地域と、水没を免れている地域があることに気付き、その理由を考える。 ・浸水を免れた地域が、微高地であるからだと理由付け、自然堤防上の集落だと想定できる。 ※自然堤防は、限られた面積であることを示唆する。	○プリントにも写真を掲載しているが、パワーポイントでも提示する。 (評価方法)　発表　【技能】
・後背湿地における土地利用を考える	岐阜大学が、昔の場所(現:長良公園)から今の場所に、移った理由はなぜか。 ・学部移転により、広大なキャンパスが必要となり、後背湿地で面積の取得ができる現在の場所が選ばれたことを、学習の中から考えさせる。	○本校の隣にあった岐阜大学が現在の場所に移転した歴史を紹介する。
・本時の重要なQの提示	他に岐阜市内に氾濫原が見られる場所はあるか。 ・境川周辺(岐阜市鶉)の地形図をみて、氾濫原だと気付く。自然堤防と後背湿地の土地利用を考える。 (自然堤防:集落・古くからの寺社、後背湿地:岐阜聖徳学園大学)	○岐阜市鶉付近の2万5千分の1地形図の提示。パワーポイントでも示して分かりやすくする。 初出資料で集落や大学の立地を調べ、本時の学びと結び付ける。